

# プルーストと「フェミナ」誌

中野知律

『スワン家のほうへ』の出版百周年に「フェミナ賞」のエッセー部門を射止めたのは、エントーヴェン父子による『マルセル・プルーストの／に恋する事典』<sup>(1)</sup>である。「ル・ポワン」誌の文芸欄を担当する父親ジャン＝ポール、「フランス・キュルチュール」の番組「悦ばしき知 Gai Savoir」で哲学を講ずる息子ラファエル、共にテレビ・ラジオ番組をはじめジャーナリズム界で精力的に作家（へ）の愛を語り続けている二人の書に、発刊当時のフランス文化・通信相オーレリー・フィリペッティが寄せた賛辞はまことに印象的である。「プルーストは万人のものであり、誰もがそこに意味と豊かさを見出す」のであるから、プルースト世界への「渡し守 passeurs [不法越境案内人の意もある]」となってくれるこんな書物が必要だ、というのである<sup>(2)</sup>。実際、1980年台後半のプレイヤッド版改訂で小説『失われた時を求めて』の新たな理解が期待されるようになって以来、いわゆる研究書と並んで読書の手引や活用術を説く実用書めいた題の書物がとみに増産されている。『プルーストによる人生改善法』（1997年）、「人生は短すぎ、プルーストは長すぎる」とアナートル・フランスを慨嘆させた長編に向き合う勇気を与えてくれる新書『100語で分かるプルースト』（2013年）、『プルーストと過ごす夏』（2014年）等々<sup>(3)</sup>。作家と共に生きる楽しみを謳歌しようとプルースト情報に人々が殺到するなか、プレイヤッド新版の監修者ジャン＝イヴ・タディエは「プルーストを少し忘れてください」とまで語ったが、実のところ彼自身、メディアを通じて「プルースト崇拜 proustolâtrie」熱を盛り上げきた一人でもあったのだ<sup>(4)</sup>。

## 「生活芸術」としての「文学」？

20世紀初頭、ジャーナリズムと文学の協調態勢が新たな段階を迎える時期に、プルーストは生きていた。七月王政下で日刊紙が増殖し、「産業文学」の誇りを受けながらも新聞連載小説をはじめ「文学」が今日に至る生産／消費のありかたを開

拓して半世紀、「知的にも物理的にも本 livre と新聞 journal の中間的な存在」としての「雑誌 revue」も 1880 年代から著しい発展をみせる。出来事に素早く要領を得た解説を付して届ける新聞と、著作のように熟成された思索の結晶との間にあって、雑誌の記事は「時事 actualité から考察を引き出したもの」であり、発行頻度やフォーマット、頁数など形態上も両媒体の中間に位置づけられる。出版の自由を保証する 1881 年法にも後押しされて、第三共和政下の定期刊行物数は順調に伸び、1908～1910 年にはピークに達した。『雑誌のペル・エポック 1880-1914 年』（2002 年）によれば、1870 年に刊行された定期刊行物が 196 であったのに対し 1908 年には 1278 を数え、1870～1914 年には 250 を超える文芸誌が存在したという<sup>(5)</sup>。

政治や社会の現況を論説し世論を形成する「大雑誌 grandes revues」の啓蒙的な役割と、より専門的あるいは「より知的で豊かな」少数の「《真の》エリート」のための「小雑誌 petites revues」との対置は、文学場においては、文芸共和国に参入し続ける人口に広くアピールする媒体に、旧来の通人の珠玉の文集が誇らかに対峙するという構図をとることになる。発行部数量と内容水準はもちろん単純に反比例するわけではなかったし、雑誌への関与には作家たちのスノビズムが微妙に投影されていた。「《小雑誌》は今最も興味深く読めるものであると私は思う。『エルミタージュ』『アントルチャン』『メルキュール・ド・フランス』は『両世界評論』よりも価値がある」とオクターヴ・ミルボーは 1891 年のユレのアンケートで述べたが<sup>(6)</sup>、その種の言明の裏にあるものをモーリス・バレスはよく理解していた。「私は常に小雑誌に並外れた共感を寄せている。そこではどんな一行も精神的である」と断じながらも、「パリを出てどこか海浜リゾート地に赴き、愚かで魅力的な女たちとおしゃべりする夕べには、虚栄心のある文士 *littérateur* は『両世界評論』に寄稿していないことをしばしば残念に思うのだ」と言い添えるのである<sup>(7)</sup>。

世紀転換期になると、この拮抗はメディアの再編成の動きの中で揺らぎ始める。卓越性の自負に支えられてきた「小雑誌」の運営規模の小ささは別種のささやかさを売りにする雑誌が大きな市場を獲得していくのだ。「大雑誌」が訴えかけるような社会の大文字の話題よりも、身の回りの出来事への関心を刺激し、個人の私的な日々の生活のゆしみかたを導く雑誌の隆盛である。その最たるものが女性誌であろう。記事主体の雑誌 revue に対して、イラストをふんだんに取り込んだ雑誌 magazine は 19 世紀を通して読者の目を惹き付けてきたが、1901 年 2 月にピエール・ラフィット (1872-1938) が創刊した「フェミナ」誌 *Femina* (隔週刊) は高品質のフォトグラビア印刷を駆使した画期的な女性誌だった。「大雑誌」の代名詞

「両世界評論」誌の1907年の予約購読数が1,5000部、第一次大戦前夜には28,000部程度であったのに対し、モードや社交生活や趣味情報を中心にした「フェミナ」誌の発行部数は1904年には13万部に達している<sup>(8)</sup>。

第三共和政政権が進める優秀な妻・母育成のための新しい女子教育政策を受けた女性たちは、自らの生き方を模索しつつ新たな家庭観を構築しようとしていた。日常においては産業製品の賢い消費者となり、観光経済の発展を利用して旅や余暇を満喫する。個の生活感と美意識に細やかに結びついた暮らし、この一見私的な領域に見えるものの営みには、階級差に応じた実質的家政術だけでなく社会的ディスタクシオンに裏打ちされた「生活芸術」センスが巧妙に動員されていた。生活と芸術の一致を目指す世紀末イギリスの芸術運動の影響を多分に受けてガブリエル・ムレーイが立ち上げた「生活芸術」誌<sup>(9)</sup>は短命に終わったが、同時期に女性にターゲットを絞って生活の美を提案した雑誌には未来が待っている。「新聞はジャーナリズムを作り、雑誌は文化 culture を作る」というジョルジュ・ソレルの言葉<sup>(10)</sup>に倣って言えば、女性誌が形成したのはベル・エポックの生活文化である。そしてプルーストと同時代の作家たちも、そこに取り込まれていたのだった——寄稿者、編集相談役、監修者として。

女性誌という支持体によって、文学は新たな享受システムの中に投げ込まれた。文学をお洒落に消費し、生活のなかに有効に活かす提言を、女性誌の寄稿作家たちは振りまき続ける——人生と文学の関係という普遍的命題に、女性読者の日常生活における文学の効用という新たな視点を加え定着させながら。少数の読書教養人が享受する文学ではなく、一般読者の「教養」としての文学の愉しみ。文学スノビズムの大衆化とでも呼びうるこの動きは、特権的な古典人文教養への代替案としてフランス文学の講読を国語教育の支柱に据えた第三共和政の教育政策の成果と言えようが、それは読まれることによってしか存立し得ない「文学」の生き残りを賭けた方策でもあったのだ<sup>(11)</sup>。女性誌の文芸欄は、そうした方策の一変奏に他ならない。

ところで、生と文学の浸潤を消費の側だけでなく生産の側からも積極的に図る試みにはすでに歴史がある。作家の日常生活と文学、生きることと読み書くこととの心地よき調和、文学を生きること——それはまさにサント＝ブーヴが開拓した領域だったのだから。第三共和政下で学業を修め、生と創造を同じ次元に置くサント＝ブーヴの方法の反駁者となる作家が、同時代の女性誌が提起する文学のありかたの根幹に関わる問題に無関心であったとは思えない。実際、プルーストは「フェミナ」誌をしばしば手に取っているのである。

## 「文学」の外延

カブールのグランド・ホテルからレイナルド・アーンに送った1908年8月6日付の手紙を、プルーストは次のような言葉で締め括っていた。「さよなら、可愛い作家さん。僕は『フェミナ』誌を探しに行かせます」<sup>(12)</sup>。1894年5月にルメール夫人のサロンで出会って以来深い愛情で結ばれていた作曲家アーンは1908年4月15日号から「フェミナ」誌に寄稿を始めていたが、プルーストが避暑地で読もうとしていた友人の記事は1908年7月15日号に掲載されたマギー・テイト Maggie Teyte (1888-1976) についての文章とみられる。そこでは、同年6月12日オペラ=コミック座にかかった『ペレアスとメリザンド』でヒロインを演じた「若い女性歌手の成功」が賞賛されていたのだ。同じ時評でアーンは「ロシア・バレエ」にも触れている。『花咲く乙女たちの蔭に』の先行テキストに取り入れられた「ロシア・バレエ」に関する一節は1910年6月10日の「ジュルナル」誌 *Journal* に掲載されたアーンの記事に拠るものとされているが、それに2年先立つ「フェミナ」誌の時評を典拠に加えてもさしつかえなからう<sup>(13)</sup>。

プルーストの書簡集に「フェミナ」誌への言及が現れるのは1908年夏以降、『失われた時を求めて』へと発展するテキスト『サント=ブーヴに逆らって』の執筆開始をひかえた時期からである<sup>(14)</sup>。制作構想を育みつつあった重要な時期にアーンを介して出会うことになったらしいこの女性誌から、音楽以外の情報もプルーストは享受していたようである。

1910年7月15日の「フェミナ」誌の音楽時評でリヒャルト・シュトラウスの『サロメ』やロシア・バレエ等をレイナルド・アーンが採り上げたことに触れた手紙の中で、プルーストはアンリ・デュヴェルノワについても述べていた。「『フェミナ』誌に時評を出しているデュヴェルノワという人は、ボナールが賞を与えようとしたのと同じ人なのかどうか知りませんが、彼の批評は馬鹿げていますね」<sup>(15)</sup>。同号のアーンのコラム「今月の音楽」と同じ頁の「隔週書評」欄では、担当者デュヴェルノワが読者女性にマルセル・プレヴォの新作『女らしさ』を推薦していた。「アカデミーの辞書では未だみつからないこの語 *féminité* をこのアカデミー会員が風雅な書で取り上げ、機智に富んだ繊細さと、深くたおやかな芸術をもってパリ社会=社交界を観察している」こと、「エレガントな要素が魅力的な言葉で描き出され、1910年のパリの風俗画 *tableaux des mœurs* が、精神のモラリストであり寛容

な賢人である偉大な小説家によって書かれている」ことをデュヴェルノワは絶賛したのだった<sup>(16)</sup>。当時の大人気作家プレヴォ<sup>(17)</sup>はしかし、ブルーストが1907年に「特に賞賛しているわけではない人々」として名を挙げていた一人である<sup>(18)</sup>。

パリの社会=社交界という自らが扱おうとしていたのと同じマチエールを「風俗画」として描いた小説およびそれを賞賛する批評に対するブルーストの批判的なまなざしは実に興味深いものであるが、にもかかわらず、作家とこの二人の間には後に実質的な仕事関係が生じることになる。名前をしばしば混同されたマルセル・プレヴォ (Marcel Prévost/Proust) とは書評の掲載をめぐってやりとりをするし<sup>(19)</sup>、デュヴェルノワが主宰する『レ・ズーヴル・リーヴル』誌にブルーストは『失われた時を求めて』の抜粋掲載を許すのである<sup>(20)</sup>。

「フェミナ」誌が取り上げる小説をめぐって「文学」概念の外延をブルーストが自問しつつあった頃、同誌の編者たちは同じ問題をジェンダーの観点から問い直そうとしていた。「流行作家の未発表小説」掲載と「高額報賞のコンクール」を「フェミナ」誌はセールス・ポイントの一つにしていたのだが<sup>(21)</sup>、そのきっかけはゴンクール賞へのプロテストだったのである。1903年にゴンクール賞の最初の委員会が召集されたとき、女性作家は排除されていたばかりか、初回も続く年の賞の選定でも女性の著作は対象にされていないことが明らかになると、1904年12月15日、「フェミナ」誌は毎年6部門（女性の美德、教育、散文文学、詩、美術、音楽）の受賞者を選定し各々1000Fを授与することを発表。うち二つの文学賞の対象は女性の作に限定するものとした。

1902年10月15日にアッシュ社が創刊した「幸福な生活」誌 *La Vie heureuse* も1905年1月に、編集長ブルーテル伯爵夫人の提唱により毎年5000Fを賞金とする文学賞を設けるが、その対応はいっそう「明確にアンチ・ゴンクールの」とみなされた。「《幸福な生活》賞 *prix Vie heureuse*」選考委員会は女性のみ22名で構成され、アカデミー・ゴンクール（10名）の2倍の人数を誇示する一方で、受賞者を女性に限らず、「選定判断はより一般的である」として、女流文学ではなく「文学」に女性を関与させる意図を打ち出したからである。（1905年の受賞作はロマン・ロランの『ジャン＝クリストフ』であり、1911年にはブルーストの友人ルイ・ド・ロベールの『病者の小説』が選ばれた。）

富裕なブルジョワ女性をターゲットに「女性の理想化を掲げた雑誌 *magazine*」として競合関係にあった両誌がゴンクール賞すなわち「文学」の正統的な聖別システムに抗してそれぞれ創設した文学賞は、それまで相容れぬものとみなされてきた

フェミニンな雑誌とフェミニズム雑誌<sup>(22)</sup>の狙いがまさに合流するところに発生したものとなる。第一次大戦後、両誌は合体し、1919年以降「フェミナ」誌の名を残して1954年まで発行される（現在の *Version Femina* とは無関係である）。また、「《幸福な生活》賞」は「フェミナ賞」に回収されて<sup>(23)</sup>、今日の主要な文学賞の一つとして存続している。両賞を完全に同一視する研究者がいるが、その名が並び立っていた当時の人々も、文学場における女性の能力啓発という同じ趣旨に則った二つの文学賞を区別する目線を持ちにくかったものと思われる。実際、「《幸福な生活》賞」審査委員会22名のうち13名が「フェミナ賞」の審査員も兼ねていたのである<sup>(24)</sup>。

「フェミナ／《幸福な生活》賞」とプルーストの所縁としては、三つの点に目を留めてみてもよいだろう。まず、ノアイユ伯爵夫人、マドレーヌ・ルメール、アルフォンス・ドーデ夫人、ピエールブルール男爵夫人、リュシー・フェリックス＝フォールをはじめ両賞の審査委員の多くとプルーストは知己であり、書簡を交わす関係にあったこと。さらに、話題となった受賞作についてプルーストが言及していること。マルグリット・オードゥの『マリー＝クレール』が1910年の「《幸福な生活》賞」に輝いた際には、日当3Fだったお針子がオクターヴ・ミルポーに見出されたシンデレラ・ストーリーや、自然主義小説で書かれる対象となった第四身分の、しかも女のなかから書く主体が誕生したという歴史的快挙に敬意を表してペギーが賞の候補から身を引いたという噂などが世間の耳目を集めたのだ<sup>(25)</sup>。1910年末から書き始めたとみられる『見出された時』のカイエ58と57の中でプルーストは、マルグリット・オードゥの小説を評した友人フェルナン・グレーグの論考に触れ、また『マリー＝クレール』からの引用文も書き留めている<sup>(26)</sup>。そして、この文学賞の話題性を察知していたからこそプルーストは、1913年11月初旬に自作小説の第一巻の受賞の可能性についてピエールブルール夫人に打診したのだろう。「私の出版社は私の本を《幸福な生活》に送らせ（遅すぎました）、同じくゴンクール賞委員会にも送らせました。そちらの方は公式には遅すぎるわけではありませんが、賞はほとんど決まっているものと私は思います。それでも、賞はとれなくとも誰かが弁護をしてくれて議論になれば、私の本にいくらか光が当たり、読んでもらえるかもしれませんし、それこそ私が望みうるすべてなのです。[...] もしかしてアカデミー・ゴンクールにお友達はいらっしゃいませんか」<sup>(27)</sup>。この時のプルーストの画策は実らなかったが、「幸福な生活」誌1914年2月15日号付録では『スワン家の方へ』が「しばらく前から刊行されてきた書のうち最も独創的なものの一つ」と評

される<sup>(28)</sup>。『花咲く乙女たちの蔭に』がゴンクール賞を獲得した1919年、二票差で敗れたロラン・ドリュレスの『木の十字架』には「フェミナ／《幸福な生活》賞」が授与された。『デバ』紙が《幸福な生活》賞の選考にコメントして、あのご婦人方はゴンクール賞の過ちの埋め合わせをした、などと言うことがないよう願っています」とはブルーストの言である<sup>(29)</sup>。

ブルーストと「フェミナ」誌。これまで目を向けられることのなかった両者の関わりを問うことで見えてくるのは、女性誌に参与する同世代作家たちの仕事を通して、「文学」が可能／不可能になる地平をブルーストがどう理解していたかという問題であろう。今後複合的な視角から進められるべきその検討を展望するために本稿で試みたいと思うのは、女性誌の提供する文学と生活との接点が、『失われた時を求めて』の中でいかに小説化されているかについての考察である。ベル・エポック期の女性の生活文化情報誌とブルースト小説が共有するモチーフとして以下に取り上げるのは、「自分の人生を生きる」という言葉と楽器「ピアノラ」である。

### 「自分の人生を生きる」

「午後のお茶会用の服 Pour le Fives O'clock」, 「海辺の装い Toilettes de plages」, 「カジノの夏の宵 Soir d'été au Casino」, 「雨のなかゴルフに興じる女性たち Les Golfeuses jouant malgré la pluie」などの記事を繰り出して<sup>(30)</sup>, モードを中心に新しいライフ・スタイルを女性に提案していた「フェミナ」誌には、ブルーストの「花咲く乙女たち」の物語を読み解く鍵となる時代証言を見出すことができる。その一つが、ヒロインの第一印象に関わる表現、ノルマンディーの海辺の避暑地パルベックで仲間の少女たちとともに登場したアルベルチーナが主人公とすれ違いざまに口にする《vivre sa vie》という言葉である。

「目深にかぶった《ポロ》帽の下で、笑いを含んだ眼をきらきらと輝かせ、艶のないふっくらした頬の一人の少女が、ぎこちなく腰を揺すりながら自転車を押してきて、私とその傍を通った時に、与太者の使うような隠語をひどく大声で叫んだので（そうした言い回しのなかに、ともかく私はしっかりと《自分の人生を生きる vivre sa vie》という嫌な言葉を聞きとった）、彼女の仲間が羽織っているケープを見て築き上げていた仮説を私は放棄し、むしろこの娘たちは皆、競輪場に入り出す階層に属していて、競輪選手の若い情婦であるに違いないと結論づけた」<sup>(31)</sup>。

「人生において自らを尊び、人生を好きなようにおくる」<sup>(32)</sup>女の新しい生き方を

いち早く小説の主題にしたのはマルセル・プレヴォであると、その席を継いでアカデミー・フランセーズ入りした際の演説でエミール・アンリオは述べていた。「マルセル・プレヴォは、『vivre sa vie』という口実のもとに若い娘たちが抱く欲望を見極めた。」「かつて女は結婚するまで修道院という完全な無知の世界に閉じ込められていた」が、「より開かれた社会にいる娘たち」は「変化への欲求と自由への渴望」を抱いて結婚制度を活用する<sup>(33)</sup>。社会的に有利な結婚をするために恋人との性愛をコントロールする少女たちを描いた小説『半処女』(1894年)の大成功によって『demi-vierge』という語は辞書に定着し、「非常に自由な生活習慣、縛りのない品行を謳歌しながら、性的関係は持たずにいる未婚の女性たち」、愛の主導権を握ろうとする娘たちへの関心が大いに高まっていたのだ<sup>(34)</sup>。

『半処女』の人気を十分に認識していたプルースト<sup>(35)</sup>が、古風なブルジョワ家庭育ちの自らの小説主人公に怖気を震わせているのは、少女たちの精神を染めつつあった「新しい女」のモラルであったと言えよう。

### 「花咲く乙女たち」の生態——小説家によるアドバイス

「自分の人生を生きる」をキーワードにしたメッセージを「フェミナ」誌は送り続けていた——ただし読者たちを、そして社会を刺激し過ぎないように。1908年1月15日号にプレヴォが寄せた文章も、その世紀末小説よりもはるかに穏当な当代女性風俗の観察である。「若い娘は妻となり、母となり、完璧な主婦となるだろうが、そうした義務に捧げるほかに、自分のために自分自身を少しばかり保っておくこと、『自分の人生を生きる』ことを望むだろう」<sup>(36)</sup>。1914年の年頭号の「ジュニア Junia」の署名がある記事「娘たちのために——昔と今」は、そうした生き方の軌道修正さえも呼びかける。「真の女性になるために、そして私の女性読者のみなさんが大切にしておられる『自分の人生を生きる』という標語を活かすためには、他人の役に立つことから始めねばなりません。自分の人生を生きる、それはたいていの場合、その日その日を着実にできるだけうまく『切り抜ける』ことなのです。」「『自分の人生を生きる』——若い娘たちのほとんどすべての信条表明の基盤にあるこの一種のモットー」は「男たちは敵」とみなす女の「反抗のライトモチーフ」になってしまったが、それこそは「私たちの教育が明らかに誤ってしまった点」であるというのだ<sup>(37)</sup>。

1909年5月に学士院会員となったプレヴォはその社会的責任を果たすかのよう

に「フェミナ・クロニク」欄で頻繁に女性の美德を説く。1910年1月1日号の「マルセル・プレヴォ氏、『ピエールとテレーズ』について本誌に語る」と題された記事で作家は、1909年に発表した自作の主題、「愛し合っている夫婦において、妻の過去が汚れなきものではないことを発見した夫」という有りがちな設定の逆、すなわち「結婚後に夫の過去の罪に気づいた妻はどうするか」という主題を論じた。結論となる「小説の道徳的教訓」とは、妻が夫の過去の罪を許しその責任を自ら負う、妻の「贖罪」なのである。同号のコラム「女性読者への手紙」では、「気難し過ぎる婚約者」からの相談——相談者女性は相思相愛の婚約者の男が「知的」でないことに気づき、「それでも結婚すべきかどうか」悩んでいる——に回答している<sup>(38)</sup>。「気の毒な青年が知的でないとおっしゃるけれど、あなたはいささか思い上がっていませんか。」「もし私が女性なら、愛さえあれば、婚約者の知的劣位にくじけることはありません。むしろ興味を持つでしょう。夫よりも優れた妻の果たしうる役割はあるはずですよ。」それが「人生哲学 philosophie です」とプレヴォは諭すのだ。登場人物の道徳意識の観察から行動の仮説を立て、様々な条件の筋書きの中で実験し結論を導いてきた、ペル・エポック風俗の実験小説家の教訓はいかにも説得的に見える。

「フェミナ」誌が主催する「マルセル・プレヴォ氏の講演会」の第一回「現代女性の身体的生活」についての報告で作家は、「ほっそりした体型がまた流行していることでスポーツ趣味が復活した」と告げ、第二回「現代女性の感情生活と社会生活」についての講演では、「個性」の重視によって、1910年代の女性が「前世代とは異なった風俗や法則」のもとに生きていると分析している<sup>(39)</sup>。女性誌と女性読者が双方向的に提供し合っていたアクチュアルな嗜好や諸情報が、ブルースト小説のマチエールとしてどう機能しているかを検証する作業が今後待たれるところだろう。また逆に、例えば1910年7月1日号掲載のプレヴォの記事、「7月すなわち《試験の月》」に「pioche ガリ勉」する女生徒たちの母親の心構えを説く文章を目にした「フェミナ」誌の読者が、『花咲く乙女たちの蔭に』の中で「作文」の追試に備えて「ガリ勉する piocher」少女の姿にどれほどのリアリティを感じたか<sup>(40)</sup>、ブルースト小説に向けられた同時代の視線に思いを馳せることもできるだろう。

### ブルースト邸のピアノラ

「ピアノラ」は、1913年末～1914年のカイエのなかで「囚われの／逃げ去るアル

「ベルチーナ」のイメージ造型に結びついて意味を持ち始めるモチーフである<sup>(41)</sup>。ベル・エポック期に一世を風靡した室内楽器に対するプルーストの関心を、「フェミナ」誌掲載の情報と照らし合わせてみると何が見えてくるだろうか。

1890年代にアメリカのエオリアン社が製造した自動演奏ピアノは、各国各社と技術革新を競いながら世紀転換期に目覚ましい構造的進化を遂げる。ロール紙に穿孔して音程や音の長短を記録した音譜「ピアノ・ロール」の再生装置として登場した「ピアノ・プレーヤー」は、指の動きをする木製のキャビネットをピアノの鍵盤に重ねて置くもので、この装置にロール譜を掛けペダルを踏んで動力を与えると、機械の指がピアノの鍵盤を叩く仕組みであった。この機構をピアノそのものの内部に組込んだ自動演奏楽器「プレーヤー・ピアノ」が現れると驚異的な売り上げを見せ、もともと商標であった「ピアノラ」の名は自動ピアノの代名詞にもなって、全盛期の20年代初頭には年間20万台が制作されたという<sup>(42)</sup>。

パリではオペラ座通り32番地に店を構えたエオリアン社は、新聞雑誌で魅力的な宣伝を繰り返していた。「フェミナ」誌の1914年1月1日号の裏表紙内側に掲載された広告頁もその一つである。



図版1 Femina du 1<sup>er</sup> janvier 1914 (vue 47/48) 裏表紙内側の広告

興味深いことに、プルーストが自宅にピアノラを置くのも、ちょうどこの頃だった。「エオリアン・ピアノラ」の購入はもともと1906年末にオスマン通り102番地への転居の際に希望していたのだが<sup>(43)</sup>、それがついになかったことをプルーストは1914年1月5日付のストロース夫人宛の手紙で報告している。

「音楽が聴けないほど悲しみに沈んではいないときには、私は音楽のうちに慰めを見出します。ピアノラ pianola を買って、テアトロフォンを補いました。残念ながら、ちょうど私が演奏したい曲がありません。ベートーヴェンのあの崇高な弦楽四重奏第14番が、販売されているロール譜 rouleaux の中にないのです。私の請求に対して、先方からの返事は《この十年来、1万5千人になるご契約者のお一人もこの四重奏をご注文になられた方はございません》というものでした<sup>(44)</sup>。ここで伝えられている「悲しみ」とは、『囚われの女』と『逃げ去る女』の物語に多くのマチュールを提供したとされるアゴスチネリとの破局によるものだろう。1913年12月初めに愛人がパリを出奔してひと月後の書簡は、小説の「私」の回想のなかでピアノラに向かっていたアルベルチーナと、実人生においてピアノラの前でプーレストが偲んだ囚われの／逃げ去る男との接点を垣間見せるものと言えようか。

ベートーヴェンの弦楽四重奏への関心をプーレストはこの時期、他の書簡でも表明しているが<sup>(45)</sup>、「フェミナ」誌の広告文はピアノラでベートーヴェンを弾くという願望にまさに訴えるものだった。「ベートーヴェンの32のソナタ（『悲愴』『月光』『熱情』等を含む）、9つの至高の交響曲、美しい序曲、甘美なメヌエット、協奏曲や四重奏、三重奏、バガテル等など……つまり彼の天分が産み出した作品すべてをあなたご自身で、お好きな時にお好きなように、完璧に演奏できたら、しかも予め一切の練習もなしにそうできたとしたら素晴らしいとお思いになりませんか？この《あまりにも素晴らしすぎて本当とは思えない》ことは、しかし現実なのです。誇張ではありません。すでに大勢の方々が我が社の素晴らしい発明品ピアノラで、そうした悦楽を享受しておられます<sup>(46)</sup>。

この作曲家に対する時代の熱狂のなかにプーレストもいたわけだが、奇妙なことに、1914年1月1日の広告ではベートーヴェンの「四重奏」もピアノラの演奏曲



図版2 « Le Triomphe du pianola », L'illustration du 1<sup>er</sup> décembre 1906

目に含まれている。そこに「あの崇高な弦楽四重奏第14番」だけはなかったということか、それともプールの書簡の文言を斟酌して読む必要があるのか。あるいは、ロール譜の問い合わせをしたのがしばらく前のことで、その後店が顧客の意向に応じたのに作家が気づかずにいたか。物理的な検証を待ちたいところである。

### 音楽趣味の偏差

ピアノラに向かうアルベルチヌについてのまとまった記述は1913年末～1914年のカイエへの加筆断章に認められる。6枚の紙片に綴られたそのテキストでは「ベートーヴェンの四重奏」がピアノラにかける曲目のなかに一度現れた後、削除されていた。代わりにアルベルチヌがピアノラで演奏するのは、印刷稿と同じく「私」の部屋の壁に「キューピッドや薔薇花を散らした18世紀の綴れ織」や「草原の広さと雪景色の静けさ」を「幻灯機」の様に浮び上がらせる「ラモーまたはボロディンの音楽」のほか、モンジュエヴァンのゴモラの愛の場面を思い起こさせてしまう曲、「ヴァントゥイユが娘のために作ったピアノのエチュード」である。「私のために一つの曲エチュードを三度か四度演奏してくれるとき、彼女には分かっていたのだった、ロール譜を変える頃には、[私の知性はその曲の構造を完全に理解し尽くし、神秘を消し去っていて、私にとって意味のある] 楽曲がこの世界から一つ減った分、私のものとなった真理が一つ増えるのがほぼ習慣になっていたことが。不幸にして、そうしたエチュードのなかにはヴァントゥイユのものもあったのだった」<sup>(47)</sup>。

6枚紙片上の先行テキストではさらに、囚われの女と「私」の会話によって音楽趣味の偏差が示唆されている。

「これから私の好きなものを演奏してはいけないかしら、『カヴァレリア』[削除]〈[加筆] マスカーニ〉を少しばかり。もうあなたにはベートーヴェン バッハの後期 四重奏〈ソナタ〉とドビュッシーの『版画』を演奏してあげたのですもの。」  
「そうしていいよ、アルベルチヌ。バッハのソナタはマスカーニを贖うだろうね、カルメル会修道女たちが罪人のために祈るように。ベルゴットやエルスチール、ブロックまでもがやって来て階段のところ『カヴァレリア』の間奏曲を耳にすることにならなければいけないけれど」<sup>(48)</sup>。

一幕物のオペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』(1890)のパリでの初演は1892年1月15日、オペラ・コミック座においてである。その間奏曲は、1910年の

カイエではオデットが好んでピアノで弾き、自分の葬送曲にしてほしいとまで言っていた曲であり<sup>(49)</sup>、バルベックではアルベルチーナが「熱狂」していたものだった。「『カヴァレリア・ルスティカーナ』をお聴きになったことはないの？ 私は素晴らしいと思うわ。」この嗜好について「私」は解釈する——エルスチールの「影響」で「アルベルチーナの絵画の趣味は、お洒落やあらゆるタイプのエレガンスの趣味のレベルに達していたが、音楽の趣味はまだそれに追いつかず、かなり遅れを取っていた」と<sup>(50)</sup>。

音楽趣味のディスタクシオンは、囚われの女と「私」の扱う楽器の違いにも表れている。小説の印刷稿では、ピアノを弾くのは専らアルベルチーナで、主人公はピアノを弾いている。楽器の分担は先行テキストでも基本的に同じだが、カイエ71の加筆の一つ（1914年頃）ではピアノに向かう「私」の姿が見られるのである。「外を歩きながら、アルベルチーナの凡庸さ、他の女を所有する可能性について考えた後で、私は家に帰り、ピアノの前に座って、四重奏第15番を演奏するのだった。」（104v<sup>o</sup>）しかしそれに続くカイエ54では「私」が座るのは「ピアノの前」に戻り（17r<sup>o</sup>）、以後その楽器が入れ替わることはない。

ピアノを弾くのとピアノを演奏するのとでは何が違うのだろうか。19世紀にピアノの普及を担ったのは女性であり、ベル・エポックに自動ピアノに熱狂したのは経済的ステイタスを有する男性だったという一般的な理解<sup>(51)</sup>が当てはまる行動をブルーストはとった（ピアノ購入の積年の夢を実現した）わけだが、小説の「私」は、ピアノを聴きはしても自ら操作はしない。その間接的な関わり方は何を意味するのか。

「イリュストラシオン」紙の1906年の広告はピアノラの意義を次のように謳っていた。「万人に、ピアノを芸術的なやりかたで演奏することを可能にする、しかも音楽の知識がなくてもそうできるようにする、この本質的に民主的な *démocratique* 機械は、社会の上層部にも評価されています。その本質的な価値の重要性は、偏見の及ばないすべての進歩的精神に認められているのです」<sup>(52)</sup>。1914年の「フェミナ」誌の広告も同様のコンセプトを繰り返している。「天分が産み出した作品すべてを、あなたご自身で、完璧に演奏できたら、しかも、予め一切の練習もなしにそうできたとしたら、すばらしいと思いませんか？」<sup>(53)</sup>

「民主的な機械」によって知識や訓練なくして手に入る完璧な演奏とは芸術的天分の偽装ではないのか。この「進歩的」装置によって文化資本の差は埋め合わされるのか。「中層ブルジョワ」<sup>(54)</sup>の孤児アルベルチーナが上層ブルジョワの主人公の

前でピアノを演奏するという構図には、趣味のディスタクシオンに深く絡んだ芸術の民主化と、複製技術の時代の芸術の行方の問題が見え透けよう。かつてスワンはオデットの下手法なピアノ演奏を愛によって、愛の記憶を反芻することで受け入れるしかなかったが、次世代の「私」は愛人がピアノで完璧に再生する楽曲の創造性について深い瞑想に耽ることができる。複製技術が万人にもたらす芸術の受動的な享受を、創作意識に活かすこと。その興味深い試行の場を、ピアノに向かう囚われの女の挿話は提供してくれるのだ。

1919年12月10日にゴンクール賞を受賞した作家に「フェミナ」誌は寄稿を求めてきたようで、その件で交渉したドミニック・シルヴェール宛にプルーストが送った書簡が残されている。「ピエール・ラフィット氏と手紙でやり取りしました。[...] 私が『フェミナ』誌に望んでいることについては、あなたと了解済みであると彼は言いました。あなたがお求めくださった短編をお渡しすることはできませんでしたので。[...] 私が望んでいるのは文章を記事にすること article ではまったくなく、大判の写真の掲載だということをあらためてお伝えしたいと思います」<sup>(55)</sup>。

プルーストが自分の実像を知らしめたい（ただし三〇年近く前の、二十歳頃の肖像画の写真によって）と考えるに至ったのは、戦後初のゴンクール賞を「病弱な老人」が受賞したとジャーナリズムが書き立て、報じられる彼の年齢が日ごとに「数歳ずつ」嵩あげされていくのに辟易してのことだ、と作家は弁明している。「そうではないことを示すのに、大判の写真以上によいものはない」というわけで、プルーストは「『フェミナ』誌の女性読者、すなわち多かれ少なかれ若い女性たち *jeunes filles*」に「ジャック＝エミール・ブランシュによる肖像画の写真版」を「提供する」ことを企てたのだ<sup>(56)</sup>。

その肖像画を、1920年4月1日発売の「フェミナ」誌は「感情分析の巨匠マルセル・プルースト氏」という一文とともに掲載した。記事は『花咲く乙女たちの蔭に』でゴンクール賞を取った「卓越した作家」を次のように紹介している。「彼は、女性が知るべき作家です。彼の著作 *ouvrages* の中では女性たちが大きな場所を占めていて、究極の慧眼と最も個性的な芸術をもって研究されているからです。まさにそれによって、マルセル・プルースト氏の見事な才能とその正当なる名声は本誌の女性読者の皆様に知っていただくに値するのです」<sup>(57)</sup>。紹介文を書いたシルヴェールに宛ててプルーストは、「あなたの御蔭で、私は *Jeunes filles en fleurs* 『花咲く乙女たち』について語っただけでなく、彼女たちに知られることになるでしょう」

と謝意を述べている<sup>(58)</sup>。

「フェミナ」誌へのこの大らかな対応は、花咲く乙女の物語を膨らませていた時期に情報源としてこの女性誌を繙いた日々の想い出ゆえか。それにしても、ブルーストが進んで掲載しようとしたのが自らの「肖像画」であって、文章テキストではなかったことは何を意味するのだろうか。もしそれが「フェミナ」誌の作家にはならない、という意味表示であったのだとすれば、同世代作家の女性誌への「文学」的アンガージュマンをブルーストがどう評価していたのかという問題とも繋がることになる。女性誌が新たに一翼を担い始めていく文学教養の大衆化のなかでブルーストが見極めようとした「文学」の位置については、稿を改めて考察を続けたい。

## 註

以下の書からの引用には略号と巻数、頁数を記す。Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, La Pléiade, 1987-1989 et 1994 [RTP]. *Correspondance de Marcel Proust*, éditée et annotée par Ph.Kolb, 21vol., Plon, 1970-1993 [Corr.]

1. Jean-Paul et Raphaël Enthoven, *Dictionnaire amoureux de Marcel Proust*, Plon et Grasset, 2013.
2. Communiqué de presse, publié le 6. 11. 2013. Culturecommunication. gouv.fr/ Le site Internet du Ministère de la Culture et de la Communication
3. Alain de Botton, *Comment Proust peut changer votre vie*, trad. de l'anglais, (1997), coll. « J'ai lu », 2010. Michel Erman, *Les cent mots de Proust*, PUF, coll. « Que sais-je? », 2013. Laura El Makki, Antoine Compagnon et al., *Un Été avec Proust*, Éd. Des Équateurs/ France Inter, 2014.
4. Jean-Yves Tadié, « Oubliez un peu Proust », propos recueillis par David Caviglioli (2010年8月1日の *Le Nouvel observateur* 対談 <http://bibliobs.nouvelobs.com/actualites/20130801.OBS1961/jean-yves-tadie-oubliez-un-peu-proust.html>).
5. *La Belle Époque des revues: 1880-1914*, sous la direction de J. Pluet-Despatin, M. Leymaire et J.-Y. Mollier, Édition de l'IMEC, 2002, pp. 9-25, 29-42.
6. Jules Huret, *Enquête sur l'évolution littéraire*, (1891), Charpentier, 1913, pp. 212-213.
7. *La Batte*, gazette satirique bi-mensuelle, 14 juin 1888. Maurice Barrès, *Journal de ma vie extérieure*, Julliard, 1994, p. 196. 当時「大雑誌」の代名詞とされていたのは *La Revue des Deux Mondes* であり, *Mercure de France*, *Revue blanche*, *Ermitage*, *La Plume* は「小雑誌」の典型とみなされていた。Christophe Prochasson, *Les Années électriques: 1880-1910*, Éditions La Découverte, 1991, p. 157. *La Belle époque des revues*, p. 9.
8. *La Belle époque des revues*, p. 11. Géraldi Leroy & Julie Bertrand-Sabiani, *La Vie littéraire à la Belle Époque*, PUF, 1998, p. 110.
9. Gabriel Mourey (1865-1943), *Les Arts de la vie*, 1904-1905. 同誌にブルーストが発表し

- たテキストが、『胡麻と百合』の翻訳の一部（1905年3, 4, 5月）と、ロベール・ド・モンテスキウを評した「美の教師」（1905年8月）であったことは意義深く思われる（1904年秋に同誌が企画した「美術と国家の分離」についてのアンケートに答える文章をブルーストは作成したが、発送しなかった）。「フランスの本当に知的な芸術家皆に読まれている」とマリー・ノードリンガーに紹介した（*Corr.* V, 261）「生活芸術」誌のコンセプトを、ブルーストが自らの美学に照らして実際にはどう考えていたのかは重要な問題である。
10. *Cahier Georges Sorel*, n°5, 1987, p. 3. Lettre à Édouard Berth du 25 décembre 1907.
  11. 拙著『ブルーストと創造の時間』名古屋大学出版会 2013年, pp. 30-69 参照。
  12. *Corr.* VIII, 203 (lettre à Reynaldo Hahn, 6 août 1908).
  13. *Corr.* X, 114-115. *RTP*, I, 1002, 1502. J.-Y. Tadié, *Marcel Proust*, Gallimard, 1996, pp. 647-648.
  14. 「都合よく手近な図書室代わりとなるベッドの上で、いつも君の神々しい記事を読み直している」とアーンに告げた1909年7月の手紙のなかで、ブルーストはまさに「老サント＝ブーヴについての僕の小説」についても語っていたのだった。*Corr.* IX, 147 (lettre à Reynaldo Hahn, le 17 ou le 18 juillet 1909).
  15. *Corr.* X, 146-148. *Femina*, 15 juillet 1910, p. 381, « Le Mois musical: Note sur des notes ». コルプの註によれば、問題の賞は1909年12月13日に「文人協会」の委員会が Henri Duvernois (1875-1937) を含め何人かの作家に与えたバルザック賞。Cf. *Le Figaro*, 14 décembre 1909, p. 3. Aber Bonnard (1883-1968) は詩集 *Les Familières* でローマ賞をとった作家。彼との文通をノアイユ夫人はブルーストに書簡で知らせている (Lettre de Madame de Noailles du 15 juillet 1906, *Corr.* VI, 154, note 5)。
  16. Henri Duvernois, *Femina* du 15 juillet 1910, pp. 381-382, « Les Livres de la Quinzaine ». Marcel Prévost, *Féminités*, Lemerre, 1910.
  17. 1905年の時点で Marcel Prévost は作家別の売上数で5位 (849,000部。1位はゾラで2,628,000部, 2位アルフォンス・ドーデ, 3位オーネ, 4位プールジェ)。 *La Vie littéraire à la Belle Époque*, p. 19.
  18. *Corr.* VII, 31 (lettre à Léo Larguier, janvier 1907).
  19. *Corr.* XI, 252 (lettre à Louis de Robert, peu avant le 28 octobre 1912). *Corr.* VII, 31, 59.
  20. 1921年11月に『ソドムとゴモラII』の抜粋「嫉妬」が掲載され, 1922年8月に渡された『囚われの女』の抜粋「無駄な用心」は1923年2月に出る。1922年秋には『逃げ去る女』の抜粋の掲載をめぐってデュヴェルノワと書簡を交わしていた。
  21. *La Vie littéraire à la Belle Époque*, pp. 109-110, 268-269.
  22. Françoise Blum, « Revues féminines, revues féministes », in *La Belle époque des revues*, pp. 211-222. 世紀転換期には女性作家の数は2100名を越え, 1907年には5000に及ぶという。 *La Vie littéraire à la Belle Époque*, pp. 264-265.
  23. 1920年代の版には二つの賞を合成して記したものもある。例えば Édouard Estaunié, *La Vie secrète* の1926年版 (Les Arts et le livre, collection des prix littéraires) にはその受賞歴が« Prix Femina “Vie heureuse” 1908 »と記されている。フランス国立図書館では1917~1921年発行の雑誌を合併名 (*Femina et Vie heureuse réunies*) で扱っている。

24. Sylvie Ducas, « Le Prix Femina: la consécration littéraire au féminin », *Recherches féministes*, Revue Recherches féministes, vol.16, numéro 1, 2003, pp.43-95. Margot Irvine, « Une Académie de femmes? », dans M. Irvine (dir.), *Les réseaux des femmes de lettres au XIX<sup>e</sup> siècle*, @nalyse, printemps-été, 2008.
25. *La Vie littéraire à la Belle Époque*, pp. 271, 274, 283-284.
26. Cahier 58, 2r<sup>o</sup>, 4r<sup>o</sup>; Cahier 57, 35v<sup>o</sup>. Fernand Gregh, « Pages de vie: Marie-Claire », *L'Intransigeant* du 4 décembre 1910. *Matinée chez la princesse de Guermantes*, édition critique établie par H. Bonnet et B. Brun, Gallimard, 1982, pp. 116-117, 366.
27. *Corr.* XII, 304-307.『スワン家の方へ』の刊行は1913年11月14日。コルプ註によれば、その年度の「《幸福な生活》賞」は12月5日に、ゴンクール賞は12月3日に決定された。ブルーストは1913年2月23日付の書簡では自作が「幸福な生活」誌のモラルには合わないだろうと述べていた。
28. *Corr.* XIII, vii, xxvi, 10.
29. *Corr.* XVIII, 518 (lettre à André Chaumeix, 12 décembre 1919).「デバ」紙はブルーストへのゴンクール賞授与を批判していた。
30. *Femina*, 1<sup>er</sup> janvier 1910, 15 juin 1910.
31. *RTP*, II, 151.
32. *Le Grand Robert de la langue française*, 2<sup>e</sup> édition, 1984-1985, « Vie ».
33. « Discours de réception de Émile Henriot à l'Académie française », 24 janvier 1946.
34. Marcel Prévost, *Les Demi-vierges* (初版 1894 年) は 1905 年までの作品別売り上げの 5 位に入る (125,950 部。1 位は A. Daudet, *Sapho*, 1884 の 310,000 部)。*La Vie littéraire à la Belle Époque*, p. 19. *Trésor de la langue française*, 1971-1983 は « demi-vierge » の初出をプレヴォの書題とする。拙論「ペル・エポックが恋した娘たち」『ジェンダーから世界を読むⅡ』明石書店 2008 年を参照。
35. 『半処女』は 1895 年に 3 幕仕立てで舞台化され、1905 年 5 月にヴォードヴィル座にかかった際にはルイザ・ド・モルナンも出演している。『胡麻と百合』の刊行を控えたブルーストはルイザ宛の手紙で、「プレヴォの戯曲を彼女が輝くばかりの美しさで演じたことが話題になっている」と告げていた。*Corr.* V, 111 (lettre à Louisa de Mornand, 23 avril 1905); V, 164 (lettre à Louisa de Mornand, peu avant le 21 mai 1905).
36. Interview à Marcel Prévost, « La Fluffy Ruffles française. Notes enquêtes sur la jeune fille », *Femina*, 15 janvier 1908, p. 598.
37. *Femina*, 1<sup>er</sup> janvier 1914, p. 22, « Pour les jeunes filles -- Jadis et aujourd'hui » par Junia.
38. *Femina*, 1<sup>er</sup> janvier 1910, p. 3, p. 5. *Pierre et Thérèse* は舞台化されてジムナズ座で上演。コラム « Les chroniques de femina » には「完全に未発表のテキスト」という付記があった。
39. « Les conférences de M. Marcel Prévost », *Femina*, 15 janvier 1910, p. 44.
40. *RTP*, II, 265, 1467. この断章の執筆は 1917 年末頃で、今日読まれているのはガリマール校正刷に挿入されたタイプ原稿に自筆で加筆修正を加えたものに拠る。拙論「《花咲く乙女たち》の作文教育」森本淳生編『〈生表象〉の近代——自伝・フィクション・学知』水声社 2015 年 pp. 191-207 を参照。

41. 拙論「ピアノラに向かうアルベルチーナ——「囚われの女」の室内画の誕生」『STELLA』九州大学フランス文学研究室, 2014年参照。
42. *The New Grove Dictionary of Musical Instruments*, art. « pianola », Macmillan Presse Limited, 1984. 『ニューグロヴ世界音楽大事典』講談社1994, 「プレイヤー・ピアノ」。中田崇「機械仕掛けのラグタイム・ピアニスト」『アート・リサーチ』Vol. 8 立命館アート・リサーチセンター 2008年3月 pp. 25-32.
43. Lettre à Mme Catusse, vers le début de décembre 1906. *Corr.* VI, 291. «[...] je désire garder tout le salon même le piano à queue auquel je compte faire adapter un pianola Aeolian ». 1906年の時点でブルーストが自宅のグランドピアノに装着することを考えていたのは、「イリュストラシオン」紙の広告にあるようなタイプ（「ピアノラ=メトロ・ステイル」）であろうか。
44. *Corr.* XIII, 31 (lettre à Mme Straus, le 5 janvier 1914). プレイヤッド註はピアノラの購入を1913年内とみる。RTP, III, 1633.
45. *Corr.* XIII, 49 (lettre à Antoine Bibesco, janvier 1914). 「稀にですが起き上ってスコラ・カントルムやコンセル・ルージュに出かけるのはいつも、ベートーヴェンの弦楽四重奏が演奏される時です。」コルプによれば、スコラ・カントルムでは1913年12月12日の晩に弦楽四重奏第12番が演奏され、第4番が同月25日、コンセル・ルージュで演奏されている。
46. *Femina*, 1er janvier 1914, 裏表紙内側の広告文。
47. Paperole « 20quinque », Ch.Nakano, « De *La Fugitive* à *Albertine disparue*: le destin en éclipse de l'avant-dernier volume d'*À la recherche du temps perdu* - évolution du roman proustien après 1914 - », thèse de doctorat (Paris IV), 1989, t. I, pp. 130-132 et t. II, pp. 17-28. 6枚の紙片は現在フランス国立図書館でN.a.f. 27350 (2), f<sup>os</sup> 162-167 r<sup>os</sup>に分類整理されている。
48. Paperole « 20sex » (cf. RTP, III, 883-884), paperole « sept ».
49. Cahier 69, 39r<sup>o</sup> (1910); RTP, I, 919.
50. RTP, II, 237, 239-240.
51. 西原稔『ピアノの誕生』講談社選書1995年, pp. 206, 214-215.
52. *L'Illustration*, 1<sup>er</sup> déc. 1906.
53. *Femina*, 1<sup>er</sup> janvier 1914
54. « son bourgeoisisme moyen » (Cahier 54, 73mv<sup>o</sup>).
55. *Corr.* XVIII, 573 (lettre à Dominique Sylvaire, vers la fin de décembre 1919).
56. *Corr.* XVIII, 573. *Corr.* XIX, 42-43 (lettre à Pierre Lafitte, vers le début de janvier 1920). Cf. *Ibid.*, 91-92 (lettre à Gaston Gallimard, peu après le 20 janvier 1920).
57. Dominique Sylvaire, « Un maître de l'analyse sentimentale / M. Marcel Proust », *Femina* du 1<sup>er</sup> avril 1920, p. 40.
58. *Corr.* XIX, 182-183 (lettre à Dominique Sylvaire, premiers jours d'avril 1920).